

◆「鑑賞の手引き」◆

一管 草之音取

音取（ねとり）とは、能楽で、主に曲の導入部や間奏で演奏され、無常感や情趣を醸し出す重要な役割を果たします。「草」とは、能楽における「真・行・草（しん・ぎょう・そう）」の「草」を意味します。真・行・草とは書道の楷書・行書・草書に由来するもので、格式高い正規の姿が真、真を応用して少しくだいたものが行、親しみやすく崩した表現が草ということになります

地唄 石橋

能「石橋」後段の謡曲から創作された、格調高い「祝儀物」の舞です。文殊菩薩の乗り物である獅子が、牡丹の花に戯れる目出度いさまを描きます。享保期（十八世紀初頭）の女形、瀬川菊之丞の踊りが地唄に残ったと考えられています。故神崎ひで師が二人立ちで舞われた曲を、出雲荅が一人立ちの素踊りとして振り付けました。

地唄 新娘道成寺

道成寺伝説とは、その昔、修行僧に恋した娘がいて、叶わぬ恋への執心から、蛇体の化け物に変わって僧を追いかけて、釣鐘の中に逃げこんだ僧を焼き殺してしまうという恐ろしい物語です。平安末期に完成した説話集「今昔物語」に収録されています。この説話を素材に、能や歌舞伎、舞踊などで多くの「道成寺物」が生まれました。「新娘道成寺」は、宝暦期（十八世紀中頃）に成立したもので、道成寺事件の後日談です。娘が遊女となって鐘の前に現れ、物語が続けます。地唄舞では「鐘ヶ岬」という題名で舞われることも多い作品です。

地唄 古道成寺

この曲は「道成寺物」の中で最も古いと言われ、元禄期（十七世紀末）に

「言はず語らずわが心 乱れし髪は乱るも つれないはただ移り気な どうでも男は悪性者 桜 桜とうたはれて 言うて袂に分け二つ 勤めさへたどうかうかと どうでも女子は悪性な 東育ちは蓮葉な者ぢやえ

「恋のわけ里 数へ数へりや 武士も道具を伏せ編笠で 張りとき意気地の吉原 花の都は歌でやはらぐ敷島原に 勤めする身は誰と伏見の墨染 煩惱菩提の撞木町より 浪花四筋に通ひ木辻の禿立ちから 室の早咲き それがほんの色ぢや ひいふうみいよ 夜露雪の日 しもの関路も 共にこの身は馴染み重ねて 仲は丸山 ただ丸かれと 思ひ染めたが縁ぢやへ。

地唄 古道成寺

「昔昔この所に まなごの莊司といふ者あり かの者ひとりの娘を持つ またその頃 奥よりも 熊野へ通る山伏あり 莊司がもとを宿と定め 年月送る 莊司娘寵愛のあまりにて あのお客様こそ 汝が夫よ夫と 戯れしをば 幼心に真実と思ひ 明かし暮して おはしける

「その後娘 夜更け人も静まりて 衣紋つくろひ鬢かき撫でて 忍ぶ夜の障りは 冴えた月影

更けゆく鳥鐘 それに嫌なは犬の 声 ぞっとした 人目忍ぶの 憂や辛や せき来る胸を押し鎮め かの客僧の傍へ行き いつまで かくて置き給ふ 早く迎へて 給はれとじっと締むれば



上方の三味線弾きの名手、岸野次郎三が作ったと伝えられています。後にできた「新道成寺」や「新娘道成寺（鐘ヶ岬）」などと区別するために「古道成寺」と名づけられたということです。

詞章は能の「道成寺」の住僧（ワキ）の語りの部分を中心に、地唄に仕立て上げたもので、ワキ語りを借りた故に、「語り道成寺」とか、その曲調から「三下り道成寺」の別名もあります。他流では僧と娘の二人立ちのものもありますが、出雲流では一人立ちとして、新たに演出・振付・作舞しています。

◆詞章◆

地唄 石橋

「牡丹に戯れ獅子の曲 実に石橋の有様は 笙歌の花降り 簫笛琴箏篠 夕日の雲に聞ゆべき 目前の奇特あらたなり

「暫く待たせ給へや 影向の時節も 今幾程にしも過ぎじ

「獅子団乱旋の舞樂のみぎん 獅子団乱旋の 舞樂のみぎん 牡丹の英にほひ満ちく 大中利中の獅子頭 打てや囃せや牡丹芳 牡丹芳 黄金のずい頭はれて 花に戯れ 枝に臥し転び 実にも上なき 獅子王の勢ひ 靡かぬ草木もなき時なれや 万歳千秋と 舞納め 万歳千秋と舞納め 獅子の座にこそ直りけれ

地唄 新娘道成寺

「鐘に恨みは数々ござる 初夜の鐘を撞く時は 諸行無常と響くなり 後夜の鐘を撞く時は 是生滅法と響くなり 晨朝の響きは 生滅滅已 入相は寂滅為樂と響けども 聞いて驚く人もなし 我も五障の雲晴れて 真如の月を眺め明かさん



せん方なくも客僧は 縊れつ 縊れつ常陸帯 二重回りは三四重五重 七巻 まいて 放ちはせじとひき結ぶ 切るに切られぬ 我が思ひ お馬繋ぐはそりや嘘つきよ とても寝ようなら はて諸共に 縁は朝顔浅くと儘よ せめて一夜は寝て語ろ 後程忍び申すべし 娘真実と喜びて 一間の内にぞ待ちいたる

「その後客僧 しすましたりと それよりも 夜半に紛れて 逃げて行く 幸ひ寺を頼みつつ しばらく息を継ぎあたる

「所へ娘かけ来たり エエ腹立ちや腹立ちや 我れを捨て置き 給ふかや ノウノウいかに御僧よ いづくまでも追っかけ行かん 死なば諸共二世三世がけ 逃すまじとて追っかくる

「折りふし日高川の水嵩増さりて 渡るべきもあらざれば 川の上下彼方此方と 走り行きしが毒蛇となって 川へざんぶと飛び込んだり 逆巻く水に浮いつ沈みつ 紅の舌を巻きたて 炎を吹きかけ吹きかけ なんなく大河は泳ぎ越し 男を返せ戻せよと 此処の面廊彼処の客殿くるくるくるくる

くるりくるくるくるくるる追ひ巡り追ひ巡り

「なほなほ怨霊 威丈高に飛び上がり 土を穿って尋ねある 住持も今はせん方なく 釣鐘下ろして隠し置く 尋ねかねつつ 怨霊は鐘の下りしを怪しみ 龍頭を銜へ七巻きまいて 尾をもって叩けば 鐘はすなはち湯となって 遂に山伏取り終ぬ なんぼう恐ろし物語